

国語

時間
60分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2、この冊子は27ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明で読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。

聖光学院中学校



(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

一、次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① ロンドン万博ばんぱくのクリスタル・パレスは、そのケタかたカかいたい竹たけまいまいが語り草となっている。
- ② パリのエッフェル塔とうが万博のために作られたことは、シユウチしゅうちの事実だ。
- ③ 国際的なイベントのポスターのデザインを新進しんしん気鋭きえいの芸術家にユダよだねる。
- ④ テーマパークに行きたいという弟の希望をムゲむげにすることもできず、早々に会場を後にした。
- ⑤ 一九四〇年の幻まぼろしになった万博では、東京と横浜を予定地とした壮大そうだいなコウソウこうそうが練られていた。

二、次の例文は、昔からある言葉遊びのひとつです。例にならって、【】内の読みをもつ二字の熟語を二つ考え、——線部にあてはまる方の熟語を漢字で書きなさい。なお、□の数は読み（カタカナ）の文字数を表しています。

例
「働き過ぎ」とかけて、「野球のピッチャー」と解きます。その心は…… どちらも、【キ□□□□□】が大切です。 【キュウソク】↓「休息」・「球速」↓〈答〉休息

①「運動会」とかけて、「宇宙ステーションとのやりとり」と解きます。その心は……
どちらも、【コ□□□□】をします。

②「スポーツ」とかけて、「インフルエンザ」と解きます。その心は……
どちらも、【カ□□□□】します。

③「国会議員」とかけて、「国民的アイドル」と解きます。その心は……
どちらも、【ニ□□□□】があります。

④「エアコンの設定」とかけて、「盆踊り」と解きます。その心は……
どちらも、【オ□□□□】が重要です。

⑤「オーディション」とかけて、「お墓参り」と解きます。その心は……
どちらも、【セ□□□□】がつきものです。

三、次の文章は、河邊徹『ヒカリノオト』の一節である。寺井（僕）は芸能事務所のマネージャーとして、ミュージシャンである染谷のことを担当しているが、染谷の人気は低迷している。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

彼の音楽は、どうしたら広まるのだろう。

単純に、染谷さんの音楽がもっとテレビやラジオに流れる機会があればいいのと思う。僕が初めて染谷さんを知った頃、つまりデビューしたばかりの頃は、今よりも彼の音楽はメディアに流れていた。実際に僕もラジオで彼の音楽と出会ったのだ。つまり、今は知ってもらえる機会が当時よりも少ない。

しかし、プロモーションの分野で僕にできることは、現実的に限られていた。まだ四年目の僕には、彼のためにドラマのタイアップを取ってくるような力も人脈もない。会社には一応宣伝の部署があるが、残念ながら染谷さんに対して熱意のあるスタッフと出会ったことはなかった。チーフマネージャーである北川さんですら熱意がないのだから、仕方のないことかもしれない。

せめて北川さんが、もう少しでも染谷さんの活動をバックアップしてくれたらいいのと思う。だから僕は、ちよつとでも何かが変わればと願いながら、ライブが終わるたびに北川さんにメールで報告を入れていた。この前のツアーでは、染谷さんの弾き語りの良さを感じられる貴重な機会であったことや、来ていたファンがとても満足そうであったことなど、毎公演後に文章にして送っていた。

ただ、いつも返事すらなかった。返事がないのはまだいい方で、たまたま機嫌が悪かったのか、一度嫌なメールが返ってきたことがあった。

「ライブがうまくいったようで良かったです。しかし、染谷のキャリアなら近い距離でお客さんを満足させられるのは当たり前です。大きな会場へ繋げられる方法を考えてください」

「北川さん、あなたもマネージャーなら一緒に考えてください」

僕はそう文章を打ち込み、ため息をついて削除してから、当たり障りのない部下としての返事を送った。

僕はこのチームの状況をどう改善していけばいいのだろう。まずは、染谷さんの味方を増やさなければいけない。

染谷さんが周りのスタッフに愛されないのは、彼自身にも問題があった。あまり柔軟ではない性格や、空気の読めない発言、清潔感に欠けた見た目。音楽の良い悪い以前のところで、染谷さんには改善すべきところがある。

デスクに向かってそんなことを考えている僕の手は、パソコンのキーボードの上で完全に止まっていた。

「寺井くん」

後ろから急に話しかけられて、僕は驚いて振り返る。

「このあと時間あるかな？ 飯でもどうだ」

なんとそこに、北川さんが立っていた。

会社のすぐ近くにある居酒屋に二人で入った。北川さんはあまり後輩を飲み誘うタイプではない。食事をするのは春以来の二回目だった。

「どう、仕事は。染谷とはやっていけそう？」

ビールで乾杯をしてから、北川さんは言った。春の頃より顔色が良さそうだった。

「はい。いい関係を築けていると思います」

「それはよかった。今さらだけどツアーお疲れ様。こっちもしばらく忙しくて、今やっと落ち着いたよ」

「武道館だったんですね？ お疲れ様です」

北川さんが担当のアーティストMIRAIは、先日日本武道館で二日続けてライブを行った。それが終わって仕事が一段落ついたところなのだろう。

「いいライブだったよ。やっぱりあの子は才能がある。若いのに自分の見せ方がうまい。これからが楽しみな気持ちにさせられる」

まだ二十代前半。デビューして数年で、彼女はスターへの道を歩き始めている。僕は彼女のライブを直接観たことがないが、その歌は街の至る所で流れている。キャッチーで耳に残るメロディと声だ。

「それに彼女のおかげで、正直俺だって助かってる。やっとこの歳で運が回ってきた気がするよ」

北川さんに役職がついたのは彼女のヒットのおかげだ。彼もそれをわかっている。これからMIRAIが大きくなっていくと、会社も北川さんをさらに評価するのだろう。

「寺井くんは、これから自分がどうなりたいと思ってるんだい？」

北川さんはお通しの枝豆を食べながら、唐突に尋ねた。

「急な質問ですね」

「いや、一回寺井くんのそういう話を聞いてみたいと思ってたんだよ。将来の夢は何ですかって、昔は

よく訊かれたでしょう。大人になるとそういうことを考える機会が減る。大人になってからの方がずっと長いのに」

確かに考えたことがなかった。僕が大学生の頃に見つけた将来の夢は、アーティストのマネージャーになることだった。染谷さんのような人を支える仕事をしたかった。そしてそれは幸運なことに今叶っている。しかも、本人のマネージャーだ。

ここから、僕自身がどうなっていきたいか。改めて考えると難しい。^{*4}この前染谷さんに言われた言葉は今も考えている。僕は音楽に救ってもらった。だから音楽に報いる仕事をしたい。でも報いるって何だろう。考えても、僕の頭の中には、やっぱりこれまでと似たような言葉しか浮かんでこない。

「僕は音楽に救われた経験があります。だから、いい音楽を作る人の手助けがしたいんです」

北川さんは、目を伏せてククツと笑った。何か間違ったことを言ったのだろうか。

「青い答えだな。眩しいよ、本当に」

「え、何か変でしたか」

「変じゃない。ただ俺が聞きたいのは、キャリア設計の話だよ。これからこの会社でどういう立場になりたいのか、もしくははいつか転職したいって思ってるのか、そういう話だ。四年目にもなると、色々考える時期だろうなって」

①僕は自分がズレた返事をしたことに気づいて恥ずかしくなった。

気を取り直して、改めて考えてみる。それでも僕にはやはり、北川さんが言うような自分の未来についての具体的な考えはなかった。この業界に入れたことが嬉しかったし、音楽を届ける手伝いができる今が嬉しい。会社での立場などわからない。

「すみません、考えたことがなくて。わからないです」

僕は正直にそう答えた。

「そうか。でもちゃんと考えておくといい。例えば十年後どうしていいのかな。こんな時代なんだ、そういうことも考えておかないと自分の身を守れないぞ」

ありがとうございます、と僕は言った。言いながら、僕はもしかすると、自分のことを考えるのが苦手なのかもしれないと思った。染谷さんの未来を考えるのは楽しいのに、自分の未来を考えるのはそれほど楽しくない。自分に自信がないからだろうか。

「ところで、染谷のチケットは全然伸びてないよなあ」

北川さんは渋い表情に切り替えて言った。染谷さんの十周年ライブまであと二ヶ月くらいしかないが、

チケットの売れ行きは依然として伸び悩んでいる。僕の抱えている深刻な悩みの一つだ。

「どうする？」

「来週イベントの方と打ち合わせがあるので、そこでも相談してみます」

「まあ、難しいと思うけどな。本人の希望で、デビュー当時と同じライブハウスをおさえたわけだけど、もっと小さな会場でもよかったんだろうね」

北川さんは腕を組みながら、どこか他人事のように言った。

「でも、そこに挑戦するのは意味のあることだと思っっています」

「売り切れればいいけどな。なあ、寺井くんは染谷の音楽をどう思ってるんだ？ 可能性はあると思うか？」

「はい。いい音楽ですので、必ず評価されると信じてます」

僕は即答した。そこだけはずっと信じている。

「なるほど。じゃあ今現在評価されてないのはどうしてだと思う？ いい音楽じゃないからか？」

急に北川さんの目つきが鋭くなった。

「……知ってもらえる機会がもつとあれば、広まるのではないかと思っっています」

「なるほど、プロモーションの問題ということだな。それも一つの答えだろう。だけど染谷だってこの夏にいくつかライブイベントに出演している。そこでライブを見せてファンが増えないのは、やはり何か理由があると思わないか？ つまりな……」

北川さんは② 変なタイミングでビールを飲んだ。僕は彼の言葉の続きを待った。

「彼の音楽は、今の時代に必要とされている音楽じゃないんだよ」

飲み込んだビールと入れ違いで吐き出されたのは、重く冷たい言葉だった。

「必要とされていない音楽なんてあるのでしょうか？」

僕は唾を飲み込んで、少しだけ苛立ちながら言った。

「ないって言いたいけど数字は正直だよな。ほら、あとからデビューしたMIRAIはこんなにも多くの人に必要とされている。彼女も別に最初から大きなタイアップがあったわけじゃない。単純な需要の差だ。なあ、作品に需要がないってのは、つまり才能がないって言い換えることはできないか？ 趣味じゃなくて、商売でやってるわけだから」

違います、と言いたかった。だけど僕も大手芸能事務所のマネージャーという立場なのだ。反論する余地はない。

「染谷とMIRAIは比べなくていいと思ってるか？ 違うんだよ。比べないのは逆に怠けてる。ちゃんと比べて、勝っていくための方法を考えないといけない」

考えている。でもわからないから困っている。アルコールのせいか、^③北川さんは普段の落ち着いた雰囲気とは違って、自分の言葉に酔ったような目をしていて。

「最近染谷が送ってくれてる新曲、いい曲だと俺も思うよ。だけど売れそうだとは思わないだろう？ 正直どうだ？」

「……そうですね。いい音楽ですが、キャッチーな音楽ではないと思います」

そこは、僕も北川さんと同じ意見だった。染谷さんが送ってくれた新曲を、僕は毎日聴いている。既存の音楽性から、さらに広がった新しいサウンドの新曲たち。音の一つ一つにこだわりがあり、試行錯誤をして音を組み合わせているのがわかる。でも、そうやって緻密に構築した音楽が売れる音楽であるとは限らない。

「染谷は何を指してるんだろうな。染谷がデビューした時、そこそこお金かけてプロモーションしてたらしいけど、それは大きなステージを目指すためだった。少なくとも、ホールでツアーを回れるくらいにな。そこまですると大きな利益が出てみんなハッピーだ。だけど今の彼の感じだと、それはもう難しいと思うんだよ。事務所もいつまでも赤字を許容できない。給料だって、今より下がったら暮らしにくいのも厭しいだろう。俺には、彼の音楽が広がる未来が見えない」

「いえ」

僕の口から、言葉は勝手に飛び出した。

「染谷さんの音楽は、きっと多くの人に聴いてもらえる日がきます。まだ可能性があります」

上司に反発するようなことを言っている自分に驚いていた。ただの願望のような浅はかな言葉かもしれないけれど、そこにのせた気持ちは本当だった。^④感情的になった僕は、なぜか目の奥が熱くなって、うっすら涙が出てきそうだった。

北川さんはふっと笑う。

「……そうか。寺井くんはいいマネージャーだな。ちゃんと結果が出ることを願ってるよ」

そう言って、少しだけ優しい顔をした。

「俺だって昔は寺井くんみたいな気持ちを持ってた。好きな音楽を信じていられた。でも、信じても売れないものは売れないんだ。期待は何度も裏切られてきた。いずれ寺井くんも気づくだろうよ。そこに時間をかけても、自分には何も返ってこない。だけど可能性のあるアーティストをちゃんと売ることが

できたら、それは自分の成果になる。寺井くんだって出世したいだろう？ 染谷を売りたいなら、頑張らないとな」

北川さんはもしかしたら、僕を奮起させるためにこんなことを言っているのかもしれない。僕の感情は彼の思惑通り、沸騰したお湯のようにぶくぶくと泡立っていた。

僕は組織の中の出世になんて興味が無い。ただ染谷さんの状況をなんとかしたいだけだ。

北川さんとそんな話をしてから、僕はすごく焦ってしまった。

これから染谷さんが大きなステージで活躍できるようにするためには、どうすればいいのか。次のシングル曲は、これからの染谷さんの活動において、とても重要なものになることは明白だった。

勝負をしなければならぬ。

熟考して僕が出した結論は、やはり曲作りを今とは違う方向へ舵を切る必要があるということだった。複雑に構築された音楽もいいが、今はもっと耳馴染みのいい、一聴していいと思えるものを目指さなくては行けない。わかりやすく染谷さんの魅力が伝わるものが欲しい。

染谷さんの魅力について考えていくと、やはりデビュー当時の音像に帰着する。ピアノと歌のシンプルなサウンド。すぐそばで弾いているような、あのむぎ出しの音。あんな音楽を、今の染谷さんが作るとうなるのだろうか。

考えているばかりじゃ物事は進まない。僕は思いを伝えるために、染谷さんに会いに行くことにした。「少しお話ししたいことがあります。会社に来ていただくのも申し訳ないので、そちらにお伺いしても良いでしょうか」

連絡をして、次の日に染谷さんの家の近くにある喫茶店で会うことになった。

平日の昼間の喫茶店は空いていた。先に来た僕は、一番端のテーブル席に座った。店にはトランペットのジャズが流れていて、周りに会話を聞かれる心配はなさそうだった。

しばらくして染谷さんは、着古したTシャツとチノパンにサンダルという格好でやってきた。

「お疲れ」

「お疲れ様です。飲み物何にしますか？」

「アイスコーヒー」

僕は店員にアイスコーヒーを二つ注文した。飲み物が来るまでの間、まずは雑談をすることにした。最近暑いですね。水分とってますか。会社でも、熱中症になった人がいるんですよ。

僕は話をするが、染谷さんは明らかに興味がなさそうで、早く本題に入りたがっていた。

「何しに来たんだよ」

仕舞いにははっきりそう言ったので、僕は諦めて本題に入ることにした。ちょうどアイスコーヒーが二つ運ばれてきた。

「曲作りの最中でしたか？」

「そうだな」

「お邪魔してすみません。その曲作りについて、少し話があるんです」

「なんだ？」

僕は失礼にならないように、嫌な気持ちにさせないように、頭の中で必死に言葉を選ぶ。

「最近送っていただいている新曲、すごくいいと思います。音楽的な工夫が伝わるいい曲ばかりです。でも、ずっとそれを聴きながら、次に染谷さんが勝負をする新曲はこの方向でいいのかと考えていました。個人的な意見なのですが、僕が思う染谷さんの魅力は、ピアノの音と歌にあると思います。そこで、次に染谷さんが勝負する新曲は、ピアノと歌を強調するために、もっとシンプルなサウンドの曲がいいんじゃないかと思っただけです。デビュー当時のような構成の曲を、僕はまた聴きたいと思ってます」

少しの間、沈黙があった。僕が言った言葉の意味を、染谷さんが正確に理解しようとしているみたいだ。な間だった。⑤ 店内のジャズの音量が、さっきよりも大きくなっているように感じられた。

「つまり、最近作ってる曲より、昔の曲の方がいいってことか？」

染谷さんはずっしりとした重みのある口調で言った。僕は気圧されそうになりながら、それでも負けずに考えていることを伝えた。

「音楽の良い悪いはわかりません。だから個人的に、という話になってしまいますが、初期の頃のよくなサウンドの曲の方が、多くの人に聴いてもらえるチャンスがあるのではないかと思っています」

ちゃんと思いが伝わるように、僕はキツパリと言った。最近聴かせてくれている曲も、去年出したアルバムも、音が進化していることはわかる。だけどそれは一般の人には伝わらない。一般の人にも魅力が伝わりやすいものは、きっと彼のむき出しの歌声とピアノの音だ。この前の弾き語りツアーをいと感じたのも、それが理由だった。そして、当時は今よりセールスも良かった。十年の時間が流れて音のトレンドは変わっても、世の中はそういう染谷さんの音を求めているのではないだろうか？

「なるほど、テラの好みはわかった。でも、違うんだよ。デビュー当時の曲をテラがいいって思うのは、テラが学生の頃に聴いてたからなんだよ」

⑥ 染谷さんはこちらの反応を待たずに続ける。

「人は十代の頃に聴いた音楽を一番心地よく感じるんだよな。どんな音楽もそれを超えることはできない。だからそんな曲を作っても、テラのための曲ができるだけなんだ。わかるか？ お前一人のための曲を作ってしまうんだよ」

「そんなつもりで言っていないですよ。それなら、染谷さんは誰のために音楽を作ってるんですか」

「誰のために？ そんなもの、自分のために決まってるだろう。これは俺の作品なんだ。俺が納得するものを作る」

「誰かに聴いてもらえないと意味がないですよ」

「だから、聴いてもらえるように努力するのがお前の仕事じゃねえの？」

染谷さんの目には、明らかかな怒気が含まれていた。頑固な時の染谷さんだ。こうなったらもう、何を言っても難しい。それに、僕の提案にこんなすぐに反発できるということは、僕が言っているような音楽性のことなど、もうすでに何度も考えてきたことなのかもしれない。

「何もわからない素人が音楽のことに口出すなよ。俺はこれまでもこれからも、俺がいいと思う曲を作るからな」

じゃあそうしてください、と諦めるのは簡単だ。でも僕の仕事はそうじゃない。なんとか今の染谷さんの状況を変えるための、糸口を掴みたい。

「……わかりました。音楽のことは何も言わないです。では、染谷さんはもう少し見た目にこだわるのはどうですか？ 普段からもっと小綺麗な服を着るのは嫌でしょうか」

染谷さんは、一度自分の着ている服を確かめるように視線を落とした。

「服装？ 普段の服装なんて勝手だろう」

「ですが、普段から身だしなみを整えると、周りの人の印象も変わると思っています」

「余計なお世話だよ」

「じゃあ僕は、一体何のお世話をすればいいんですか！」

自分が思っているより大きな声が出た。冷静に話さなければ、と思う僕を裏切り、言葉は想いを追い越すように出てくる。

「僕は染谷さんが良い状況になるように考えてるんです。それに対して『余計なお世話』なんて言葉はないんじゃないですか。染谷さんに足りないのは周りを思いやる力ですよ。音楽とか、それ以前の問題です」

憧れの人に、僕はなんてことを言ってるんだ。汗が背中を一筋流れた。だけど僕は、染谷さんに幸せになってももらいたいから――。

「……そうか」

嫌な沈黙のあと、染谷さんは乾いた声を出した。言葉に続きはなく、ただ店内を流れるジャズだけが僕らの間にあった。僕は染谷さんの声で、冷静さを取り戻すことができた。

「すみません。ただ僕は、染谷さんの音楽を広める方法を考えたいんです。真剣なんです」

「あいな」

染谷さんは迷ったように少しの間黙った。これから言う自分の言葉に怖くなっているみたいだった。

「……俺だって、わかっている。俺がいいと思う音楽は、残念ながら世間に求められてない」

そんなこと、言わないでほしい。染谷さんに言っただけでいい。

「大丈夫です、染谷さんの音楽はちゃんと届くはずですよ。まだチャンスはあります」

「いや、知ってるよ。売り上げだって厳しいんだろ」

そんなことも気にしないで、あなたには好きに音楽をやってみてほしい。

「なんとかなります。僕も頑張りますから」

「……誰のために音楽を作ってるか、か」

染谷さんは、ハサミでまっすぐ切ったような言葉を吐いた。

「なんですか？」

⑦「いや、なんでもない。考えてみるよ」

染谷さんは立ち上がった。テーブルの上の伝票を取ろうとしたので「会社で払います」と僕は言った。

彼は「すまん」と言った。

「テラって、普段けろりとした顔で喋るくせに、意外と感情的になるんだな」

そんなよくわからない感想を残して、染谷さんは先に喫茶店を出ていった。

テーブルの上には、二人とも口をつけていないアイスコーヒーが残っていた。

僕は、感情的になってしまった。

落ち着いて、さっき自分が言った言葉を頭で反芻する。間違っただろうか。いや、伝えるべきだったことは伝えられたはずだ。汗で濡れた背中が、べっしょりして冷たくなっていた。

大丈夫だ。染谷さんは、きっといい音楽を作ってくれる。

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) *1 プロモーション……ここでは、染谷そめたにの活動を宣伝する取り組みのこと。

*2 ドラマのタイアップ……ここでは、染谷の曲をドラマの中で使ってもらうこと。

*3 キャリア……仕事の上での経験や実績。あとの「キャリア設計」とは今後の仕事の展望のこと。

*4 この前染谷さんに言われた言葉……本文より前の場面で、音楽むくに報いる仕事がしたいと言った寺井てらいに対して、染谷はそれが具体的にどういう意味なのかをたずねた。

問三——線部③に「北川さんは普段の落ち着いた雰囲気とは違って、自分の言葉に酔ったような目をしていた」とありますが、このときの寺井の心情について述べた文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そもそも同列に扱えない染谷とMIRAIを比較する、北川らしからぬ断定的な物言いに、自分との埋めがたい価値観の違いを実感している。

イ 若かったころの北川を現在の寺井に重ねてマネージャーとしての寺井の出世を願う北川の思いが、いつも以上に重荷に感じられて押しつぶされそうになっている。

ウ 仕事で音楽に関わる者としての心構えを説く北川の口調の中に、自身の成功に対する自負が透けて見えてしまい、違和感と不満を抱いている。

エ 独特な言い回しで後輩に対して訓戒を述べる北川の語り口の中に、安全な場所から発言する大人のずるさといやらしさを感じて辟易している。

オ 的確な分析に定評のある北川が、染谷のことになると日頃の冷静さを失っていることを意外に思い、一抹の寂しさを感じている。

問五

——線部⑤に「店内のジャズの音量が、さっきよりも大きくなっているように感じられた」とありますが、このときの寺井について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉を選んで必死に伝えたが、反応がないことから染谷の気分を害していることを感じ取り、ここからどのように挽回すればよいか思い巡らしているため、無関係なジャズの音など耳障りだと感じている。

イ 言葉を選びながらも今の染谷の姿勢を批判するようなことを述べたことに対して、染谷がどのように感じているのかを心配しつつ、神経を研ぎ澄ましながら染谷の返事を待つ間の沈黙がより際立って感じられている。

ウ 染谷が再起する道のりについて自分なりに考えて伝えたつもりだったが、素人の個人的な好みをプロに伝えたことは、やはり間違いだったのではないかと思ひ直し、いたたまれない気持ちで、ただただ不安を感じている。

エ 染谷の魅力を伝える方法を必死に考えて話したものの、過去の染谷を肯定することが図らずも今の染谷を否定することであったということに今更ながら気づき、取り返しのつかないことをしたと後悔している。

オ 染谷が望まないとわかっているのに、マネージャーという立場でありながら思わず正直な意見を伝えてしまったことで、染谷の返事を待つ沈黙と喫茶店に流れるジャズの音がまるで自分を責めているかのように感じられている。

問六

——線部⑥に「染谷さんはこちらの反応を待たずに続ける」とありますが、このときの染谷の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何とかしたいという寺井の思いはわかるが、いずれも自分にとってはわかりきった話にすぎず、早くこの話を終わらせたいと思っている。

イ 今までの付き合いの中で寺井のことを軽んじており、寺井とのやりとりからは何も得るものはないため、これ以上相手にしたくないと思っている。

ウ 寺井の意見は個人の意見の域を出ず、皆に広く受け入れられる音楽を目指す苦悩は自分だけのものであり、そこに踏み込んできてほしくないと思っている。

エ 自分のために考えてくれている寺井には感謝しつつも、少しでも隙を見せれば反論してくるのではないかと恐れ、捲し立てて煙に巻いてしまおうと思っている。

オ まるでファンの感想のようなことを提案してくる寺井のマネージャーとしての力量に失望してしまい、もはや寺井の好みに合った曲作りなどしたくないと思っている。

問七 ——— 線部⑦に「いや、なんでもない。考えてみるよ」とありますが、染谷の音楽に対する姿勢の変化を八十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】 ——— 必要ならば使いなさい。

80 60 40 20

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文化財に対する5W1Hの疑問に答える情報を探ることは、これまで詳細が不明だった文化財の起源や系譜など、歴史の謎に迫ることもつながり、たいへん興味深い。そして、その手段として最近では自然科学的アプローチも用いられることが多くなってきた。まだまだ読み解けていない文化財の謎に迫る手段として期待されており、その成果が「歴史のロマンに迫る」というようなキャッチフレーズのもと、テレビや新聞で大きく報道され、衆目を集めることもよくあることである。確かに、私自身も実際に調査をしていて胸が高鳴るような高揚感を感じることも少なくない。自然科学的アプローチを用いて文化財の調査に関わる研究者の多くが、この魅力に捕らわれることは間違いないだろう。

しかし、ここで大切なことは、「文化財の持つ情報」は、引き出すことだけが重要なのではないことである。自然科学的アプローチは、さまざまな機器分析装置を用いなければいけない。従って、自然科学的アプローチに挑戦することによって、「文化財の持つ情報」を攪乱し、さらには肝心の文化財保護に対して逆行する事態を招いてはいけないということを肝に銘じる必要がある。例えば、「文化財の持つ情報」を得るという目的で、文化財から分析に必要な試料を相談もなく勝手にサンプリングすることなどは禁物である。文化財の情報を探ることだけに焦点を当てるために、資料の姿かたちを改変し、さらにその価値を消失させてしまうようなことがあってはならない。調査にあたっては、所有者や関係者との十分な協議を重ねた上で、実施の是非を判断する必要がある。

本書の主旨からは少し余談になるが、ここでもう一つ大切なことがある。機器分析装置は、基本的にその装置の性能を最大限に発揮するために要求される仕様に従い調整された試料に対してのみ、分析精度を保証する。文化財は、形体も複雑、さらに不均質であり、しかも劣化が進むとともに表面に汚れや付着物も存在している。また、分析試料のサンプリングも困難な場合がほとんどである。文化財の分析では、高度な分析手段を用いれば、精度が高い分析値が保証されるものではないということである。この点については、本書では深入りしないが、注意だけは喚起しておくことにする。

① 少なくとも、非破壊で何でもわかるという魔法のような分析方法は存在しないということだけは理解しておいていただきたい。

自然科学的アプローチには、文化財そのものの姿とそれが秘めた価値を確実に次世代に継承することに寄与するという、もう一步踏み込んだ使命を目的とする領域があることを忘れてはいけない。これ

が、「保存科学」と呼ばれる分野の使命である。保存科学の研究者にとっては、「文化財の持つ情報」を引き出すことは、研究の入り口の段階であって、文化財を保存・継承するという、実際には簡単に成果の出ない^B息の長い地道な作業の序章にしか過ぎないのである。

実資料としての文化財を預かる博物館や美術館のような施設では、多くの科学的なアプローチで得た情報は、博物館施設の根幹である「公開・展示」という大事な役割に直接関わる基本情報となる。

しかし、「収蔵・保管」という文化財の保存・継承に関わるさらに大事な使命を達成するためには、文化財がどんな構造をしているのか、そしてどのような劣化を被っているのか、という現状の精確な把握が重要であり、例えば、表面からの肉眼観察だけでは把握できない内部の状態を探るためには、X線透過観察やX線CT観察などが不可欠になってくる。これらの調査は、われわれが健康維持のために臨床的に行う健康診断にたとえるとわかりやすい。このような日常的な自然科学的アプローチの^②副産物として、これまで把握できていなかった5W1Hに関わる情報が明らかになった時に大きなニュースとして報道されることになるのである。

また、文化財の状態によつては、修理・修復が必要になってくるが、この場合も、文化財が持つさまざまな情報を攪乱させないように、構成する材質と劣化状態に応じた適切な対応をとるためにも自然科学的な調査と科学的な方法論が必要となる。博物館施設で仕事をする学芸員は、従来から人文科学的な分野に精通していることを要望されるが、最近では、文化財資料の保存という観点から自然科学的な分野の知識も要求されるようになってきている。二〇〇九(平成二一)年には、大学での学芸員養成講座において、資格認定のための必修科目に「博物館資料保存論」が加えられ、この分野の重要性が大学における学芸員育成教育の現場でもようやく認知されるようになったといえよう。

ここで改めて認識しておかねばならないことは、文化財の現在の健康状態を把握することは、「保存」することだけに寄与するのではない。文化財を安全に賢く「活用」するためにも現状の把握が不可欠であることは言うまでもない。保存科学者が文化財保存に下す判断は極めて重要なのである。場合によつては、^③「活用」に対して、ドクターストップをかける強い権限を持つこともある。すなわち、「保存科学」は、冠に「保存」と謳うが、実際には文化財の「活用」のための科学としての役割も担っていることを再認識する必要がある。

^④「修理」と「修復」という言葉は、文化財の分野ではどちらも使われる。この使い分けに対してはいろいろな考え方があろうが、私なりにここで整理をしてみようと思う。

「修理」というのは、材質の腐食や劣化も進んでいるがまだまだそのものの機能性を失ってはいない、そういう状態のものの機能性を回復させるために手を入れる作業と考えてよいだろう。それに対して、例えば、発掘で出土した考古遺物のように、すでに機能性をなくしているようなものを何とか形を整え、次の世代まで伝えていくためにとる作業を「修復」としてよいのではなからうか。

また、少し見方を変えると、伝統的な技術を用いることを基本に、その技術自体をも維持するというのが「修理」であり、新たな科学的な方法論を用いるなど、伝統的手法も含めてさまざまな方法を駆使することを「修復」とするとわかりやすいかもしれない。

すなわち、「修理」より「修復」の方がカバーする範囲が広く、少し大きな概念であると言ってよいだろう。イメージとして、伝統工芸的な技術が関わるような場合は「修理」にあたるわけである。これが、国宝や重要文化財に対しては、「修復」より「修理」を使うことが多い背景といえるだろう。

また、「修理」の「理」は、「ことわり・みち」を意味する。すなわち、「修理」というのは、ただ形を戻す、使えるようになればよいという意味合いというよりは、もっと深いものがあるのではないかと、私は捉えている。^⑤修理の倫理に則^{のっと}って行う作業と捉え、その倫理とは、文化財の価値を損^{そと}なわなない、すなわち文化財の持つ情報を攪乱^{かんらん}しないということにあたる^{あた}ると考えるのである。

戦禍^{せんか}、自然災害、さらには人為^{じんい}的破壊などから守られた有形文化財であっても、健全な状態で存在できるかどうかは、置かれた環境^{かんきやう}に大きく左右され、程度に差はあるにせよ腐食・劣化現象は起こることになる。

腐食というとマイナスのイメージがあるが、これは地球上の物質が避^さげることができない自然現象である。銅や鉄などの金属は、地球の地殻^{ちかく}内で酸化物や硫化物^{りゅうかぶつ}などの化合物の状態、すなわち鉱物として存在する時が最も安定している。火をエネルギーとして活用することを学んだ人類は、火を使って鉱物中から必要な金属を抽出^{ちゅうしゆつ}することに成功し、得られた金属を加工してさまざまな利器を制作し、文明を築いた。しかし、大気中に晒^{さら}された金属は、もともと安定していた鉱物の状態、すなわち地球の地殻にいた状態に常に戻ろうとしている。この現象が、いわゆる腐食、すなわち錆びるということである。木材や紙などの有機質の素材は、材質の変質劣化とともに、腐朽^{ふきゆう}、すなわち微生物^{びせいぶつ}による分解も生じる。

このように、さまざまな材料で構成された有形の文化財は、制作された時から、材料が自然に腐食し、劣化していくことは避けられない。従って、貴重な文化財の姿かたちの維持をしつつ、秘められたさま

さまざまな情報を温存しながら保存・継承していくためには、腐食や劣化の現象を十分理解して対応していかなくてはいけない。腐食や劣化の促進を制御するために、例えば文化財の置かれた環境の保全を図るなど、さまざまな対策を講じる必要があるが、実際には人智の及ばない世界への挑戦でもある。

有形の文化財の腐食や劣化で傷んだ部分だけを取り除き、オリジナルに近い材料で補填して、「ものづくり」によって生み出された文化財の姿かたちを何とか維持しようとする試みが「修理」であり、古代から今日まで定期的に連続と続けられてきている。古くから伝えられている有形文化財は修理の恩恵に与っていないものはないと言っても過言ではなからう。⑥有形文化財の維持には、修理は不可欠なのである。

——村上隆『文化財の未来図——〈ものづくり文化〉をつなぐ』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) *1 サンプリング……サンプル(試料)として一部分を採ること。

*2 補填……もとあったものの代わりとして補うこと。

問一 線部A「喚起」、B「息の長い」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、あとのア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「喚起」

- ア 久しぶりに故郷に戻ったところ、旧友たちから大いに喚起された。
- イ 明日の大切な試合に向けての監督の言葉は、勝利への意欲を喚起した。
- ウ 里山に出現する猿に対して、喚起して生活するよう呼びかけられている。
- エ 大接戦の末に強豪チームを退けて、チームメイトは喚起の声を上げた。
- オ インフルエンザ対策のため、適宜窓を開けて喚起に努めなくてはならない。

B 「息の長い」

- ア ここは、有力な政治家の息の長い地域として知られている。
- イ 彼の息の長い無謀な潜水には、いつもヒヤヒヤさせられる。
- ウ 昨晚の大雪のせいで、息の長い雪下ろしに従事し、腰痛が悪化してしまった。
- エ 社運をかけた商品が、息の長い人気商品となって今や横浜土産の代名詞になった。
- オ 大会に向けての辛く厳しい練習の日々だったが、息の長い気持ちで乗りきることができた。

問二——線部①に「少なくとも、非破壊で何でもわかるといふ魔法のような分析方法は存在しないということだけは理解しておいていただきたい」とありますが、筆者はここでどういうことを伝えたいのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文化財を科学的に分析する上では、サンプルを採取するなど、たとえわずかであったとしても文化財を傷つける行為も必要になるということ。

イ 文化財の正確な情報を収集するためには、分析を目的としたサンプリング以外の方法の必要性も認めなくてはならないということ。

ウ 文化財が置かれている様々な現状を踏まえると、より精度の高い分析が必要であり、そのためには高度な分析手段にどうしても頼らざるを得ないということ。

エ たとえサンプリングしたとしても、劣化した現在の情報しか得られないため、制作当初の情報を得られる方法など存在しないということ。

オ 文化財の価値を守ることを常に主眼とすべきであり、いくら研究のためであっても、文化財を傷つける行為は許されるものではないということ。



